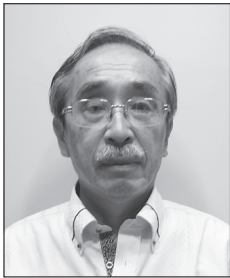


「千葉の里山の魅力を探る ～ JR 久留里線沿線を中心に」について



千葉商科大学人間社会学部教授

鈴木 孝男

SUZUKI Takao

プロフィール

1947年、茨城県日立市で生まれる。東京都立高校、高専教員を経て、1993（平成5）年に千葉商科大学商経学部教員。2014年から人間社会学部教員。2016年から地域連携推進センター長。専門は中小企業論、地域産業論。主な業績は、『信用金庫と中小企業のイノベーション』税務経理協会、2013年。「東京の古い産業集積地域におけるイノベーション」商工総合研究所「商工金融」2013年5月号、『経済環境の変化と地域経済』国府台経済研究第17巻第1号（2006年）ほか。

1 シンポジウムの目的

私たちは「観光を通じての地域活性化—千葉県を例に」というテーマで2015年から研究プロジェクトを実施してきた。そして1年目のまとめと今後の研究の方向性を探るために、経済研究所主催として「千葉の里山の魅力を探る」と題したシンポジウムを2016年3月12日に千葉商科大学1号館1101教室で実施した。シンポジウムは公開とし、一般市民や学生が約50人参加した。

私たちのプロジェクトでは、千葉の中でもJR久留里線とその沿線に焦点を当てて研究活動を行ってきたが、その過程で久留里線沿線に広がる里山の存在に気づかされた。久留里線は木更津～上総亀山までの32.2kmのローカル線で、途中で久留里という城下町がある。久留里線は当初田んぼの中を走っているが、横田あたりから丘陵地帯の裾を走るようになり、久留里から上総亀山までは里山の中を走っている。

他のローカル線の例に漏れず、久留里線は沿線の人口減少や自動車の普及、さらには少子高齢化の影響などで乗客が減少し、それに合わせて列車の本数が削減されて一層乗客減少を招くという負のスパイラルに陥っている。

しかし、我々が学生達と調査を行ってみると、久留里やその周辺の里山にはたくさんの魅力があり、その多くは現代社会の大都市住民が必要とする「いやし

や「健康」などに関するものであることがわかった。特に里山は豊かな自然、歴史、伝統的な生活習慣などが残っており、それを掘り起こして活用することで十分に地域活性化に結びつけることができると感じたのである。

こうした発見を踏まえて、シンポジウムでは上総地域の里山活動を行っている5人の方々をお招きし、我々の活動も含めて里山の魅力をシンポジウムの参加者と共に共有することを目指して報告と討論を行った。

2 基調報告

シンポジウムは人間社会学部の佐藤哲彰専任講師の司会のもとで行われた。最初に、主催者である経済研究所所長の商経学部教授上山俊幸氏の挨拶があり、本プロジェクトの意義についての話があった。その後研究プロジェクトの代表である鈴木から「里山の魅力とは何か」と題して基調報告があった。その要旨は以下の通りである。

そもそも千葉県は山間部の標高が低く、そこには古くから人間が奥まで深く入り込んで暮らしており人間生活と密接に結びついていた。つまり千葉の山間部は里山状態になっていたとすることができる。千葉県の貝塚の分布と海岸線の移動をみると、縄文時代に人々が生活していた場所は現在よりかなり内陸部に入ったところであった。それがのちに海岸部が隆起して海岸

平野が形成され、さらに江戸時代から現代に至るまで埋め立てが行われたことで、人々の生活の舞台が里山から海岸部に移動していったのである。

さらに、昭和30年代以降に重化学工業の大規模工場が海岸部の埋め立て地に立地するようになり、その周辺では人口が急激に増加したのである。その結果、かつての生活の中心であった里山は人口減少が進み、町や集落が縮小して過疎化が進んだ。こうして古い歴史のある地域は取り残され、そこを通る久留里線のようなローカル線も乗客急減に悩んでいるのである。

しかし久留里線沿線の里山を見ると、小櫃川や小糸川のような中級河川をはじめ、平成の水百選に選ばれた久留里の湧き水、谷津田、レクリエーションに利用されている丘陵部など多くの魅力を持っている。そこには日本人なら誰もが親しみを感じる故郷の原風景が広がっているのである。

観光による地域活性化という場合、かつてはJTBなどの旅行業者が扱っているような「見る」「食べる」「遊ぶ」の「るるぶ型観光」が中心であった。しかし各地で地域興しのために観光地が開発され、しかもどこも似たような特徴（温泉、グルメなど）で競っている現状に於いて、それらの観光地の定番資源を持つことができない「普通の地域」では新しい切り口での観光で外部から人を招き入れることが必要である。それが「体験する」「交わる」「住む」の「るるむ型観光」である。

つまり地域の人々の普通の暮らしを体験し、地元の



パネルディスカッションの様子

人々と交わり、そこに移住するという定住促進型の観光こそが、観光で地域活性化を図る場合に最も重要な観点である。

3 地域活性化における若者の役割—人間社会学部学生の報告

次に久留里線沿線を調査した学生から、報告と提案があった。人間社会学部2年の川名友貴君、中野智仁君は、地元の高校生達との活動も踏まえて、若者の目線で見ると久留里線沿線の魅力と活性化に向けた取り組みの提案（久留里線の車両への自転車の持ち込み、乗車券におみくじをつけるなど）を行い、さらに2月に行った調査をもとに小湊鐵道養老溪谷駅から久留里線久留里駅までのウォーキングコースの設置を提案した。

4 里山活動の報告

(1) 上田 隆氏（上総自然学校）

上総自然学校は袖ヶ浦市にある真光寺が運営する農業体験を行っている組織である。

上田氏は真光寺の保守管理を行っているほか、この学校の運営を行っている。真光寺では周辺の里山で耕作放棄地が増えたり、産業廃棄物処分場や土砂の採取場が増えていることに危機感を持ち、休耕田を預かったり買い取ったりして、都会の人々が農業体験ができるように環境を整備している。そこでは参加者に田植え、除草、収穫などの作業を行ってもらい、その参加状況に応じて収穫した米を渡している。

現在、固定客（リピーター）を中心に一定の参加者を得ながら「農業体験」という商品を都会の人たちに提供し、日頃のストレスの発散や子供の情操教育の場として利用してもらっている。利用者からは良い反応を得ているようだ。

参加者には家族連れだけでなく、IT企業の社員も日頃のストレス解消をかねてボランティア活動として参加しているそうである。

(2) 田中久雄氏（蓑会創設者）

田中氏はヨーロッパに拠点を持つ旅行代理店に長く勤務し、ロンドンでは10年間生活をしていた。定年退職後帰国し、どこに住むかで首都圏の各地を探した

末に久留里に落ち着いたという。久留里を選んだポイントとしては、①静かな里山、②穏やかな気候で晴れが多い、③水のおいしいところ、④近くに歴史の香りがする街がある、⑤首都圏にあって東京への交通の便が良いなど、などの項目をあげて1年あまりをかけて約20カ所回った末に、久留里にたどり着いたとのことであった。それが今から17年前のことであった。

田中氏は里山ライフを楽しむ同好会を作ろうと地元の有力者の参加を求めて10年前に菘会を設立した。菘会では畑を借りての農作業、パンや豆腐、味噌などの食品づくり、炭焼き、ウォーキングなどを行って里山暮らしを楽しんでいる。会員数は44人(報告時)で、地元住民が25%、久留里近郊居住者が60%、遠隔地に居住して時々訪問する人が15%という構成だとのことである。

年間50回から多いときで100回の活動を行いながら、会員相互の親睦を深めているとのことである。菘会の特徴は、古くから住んでいる旧住民と新しく久留里にやってきた新住民の融合を意識的に進め、それを地域活性化の一助にしようと楽しみながら活動をしているところである。多様な活動を通じてこうした努力を続けているところにこの会の魅力があると思われる。



人間社会学部鎌田准教授による高大連携の報告の様子

(3) 豊島大輝氏(きみつ里山ネットワーク コーディネーター)

豊島氏は君津市を中心に里山活動を行っている方

ある。豊島氏の報告を整理すると以下の3点になる。その一つはエネルギーの「地産地焼」で、君津の山林整備で出た間伐杉を利用して、温泉旅館のボイラーの燃料として利用することを実施している。次に東京の大学生の環境サークルの活動(合宿型のボランティア活動)を支援することで、環境問題にも取り組んでいる。さらに歴史的資産の発掘として、鹿野山神野寺に参拝する人々が通った巡礼路(鹿野山古道)の復活を目指した活動も行っている。

豊島氏はこれらの活動を通じて、様々な可能性を持つ里山の魅力を多くの人々に知ってもらい、気軽に里山に触れることができるようにしているのである。

(4) 坂本好央氏(NPO 法人久留里フィールドワークミュージアム代表)

坂本氏は久留里の古い建物の保存や活用を行う活動をしている。坂本氏によれば久留里は城下町として知られているが、町が発展したのは明治以降で、鉄道(久留里線)が開通したあとに、里山から都会(東京方面)への物資の集散地として賑わいを見せたのだという。現在の商店街を形成する建物の多くは「昭和8年頃に建てられた贅を尽くした魅力的な建築物が多い」(シンポジウム報告書16ページ)とのことである。久留里が物資の集散地となった要因は、古くは小櫃川の水運があり、その後大正元年に久留里線が開通してからは鉄道が町の発展に貢献したそうだ。江戸時代から大正時代まで、河川交通により発展した町が、鉄道の開通によって衰退するという例は佐原のように全国にあるが、輸送の主役が鉄道に代わってからも発展し続けた久留里のような例は珍しいそうである。

その後里山から久留里を通して江戸・東京方面にも物資も流れていき、久留里を支えた産業が衰退する中で久留里やその周辺の人口が減少した。しかし最近里山への関心が高まってきているので、今後は久留里が大都市から里山に向かう人の流れの入り口として役割を果たしていけば良いのではないかと、というのが坂本氏の見解である。

(5) 高木繁昌氏(いすみ自然エネルギー株式会社取締役)

高木氏はもともと都内(目黒区)に住んでいたが、

12年前に旧夷隅町（現在いすみ市）に別荘を購入し、現地で街づくりに参加するなかでこの地の魅力に惹かれ、8年前に移住した経歴を持つ。現在は都内での仕事をこなしながら、いすみ市ではいすみ自然エネルギー株式会社役員として、地元の経済活動にも参加している。

高木氏が関わっている農園会社は、もともとブルーベリーの栽培を行っていたが、太陽光線がきついとブルーベリーの生育に悪いことから、経営者の藤江氏がソーラーパネルを日よけとして配置して、両方を生かす事業を始めたのである。このような形態を「農園型ソーラーシェアリング」と呼んでいる。

太陽光発電は最近空き地の有効利用策として利用が進んでいるが、パネルを敷き詰めることで景観に悪影響を及ぼすとして評判が悪い。いすみ自然エネルギー株式会社のやり方は、自然と景観の双方を生かす方法として注目されている。

その他同社では木質系バイオマス（廃材を利用した発電事業）と廃校になった公立学校を結びつけて温浴施設を作る事業に取り組む予定にしているという。

5 里山の魅力をどう生かすかー討論

以上の5人の方の取り組み事例に加えて、本学人間社会学部の鎌田光宣准教授が久留里線プロジェクトで行った高大連携活動を紹介した。鎌田准教授は袖ヶ浦高校の情報コミュニケーション学科の生徒達と久留里線の魅力をツイッターで発信する取り組みを行い、そこに「きはいさおちゃん」（久留里線で使われているキハ130系というディーゼルカーを中心に地元のダムや川などを合わせて組み立てたもの）というご当地キャラクターを登場させて100人以上のフォロワーを呼び込んだという。高校生の視点や柔軟な発想力を地域活性化に結びつけた取り組みとして評価できる。

その後、すべての報告者が参加して、里山の魅力をどう生かすかについての討論を行った。そこでは、「里山」について地元の人と外部の人とで受け止め方が異なること、地元の人と外部の人の連携が重要であること、ライフスタイルに共感する人が自然に集まること、里山の自然に触れてそこに深い関わりを持つと

うとする人が出てきているので、そのネットワークを大切にすることが重要、里山との関わりに多様性が求められる、里山を材料にした地域活動で人を呼ぶことが定住につながる、などの意見が出された。

若者に期待することとしては、若者の思い切った提案や活動を期待する、遊び心を持って里山に来てほしい、若者の情報発信力に期待、地元高校生が地域に関心を持つことに期待する、などの意見が出された。

当日、千葉県報道広報課千葉の魅力発信室の高橋輝子室長と榊田善啓主幹、木更津市企画課の中村伸一副課長が参加してくれていたため、それぞれ発言をもらった。

それによると、県と千葉商科大学が連携し、地元自治体や関係者が一緒になって魅力発信に取り組めたことに感謝している。千葉の里山に多様な魅力があることがわかってよかった。ローカル線を切り口にした取り組みができた、上総丘陵が都心の方々にとって魅力があることがわかった、地元がどう受け皿を作るかが課題、今回久留里線プロジェクトに地元の高校生が参加したことは大きな意義があるなどのコメントがあった。

最後に人間社会学部の犬塚先教授がこのシンポジウムを以下のようにまとめた。里山に対して多面的な取り組みがあることがわかった。今回のように大学生や高校生が参加することは重要である。特に地元の高校生にとって、自分の将来の人生設計に里山が何らかの意味を持つことができるかどうかは里山を中心とした地域活性化の鍵を握るといってもよいのではないかと。

今回のシンポジウムにおいて、上総地域を含む千葉県県の里山や田園では、東京からの距離が近いことを生かした多様な活用方法があることが指摘された。地元を中心にどう反映させるかを課題としてシンポジウムが締めくくられた。